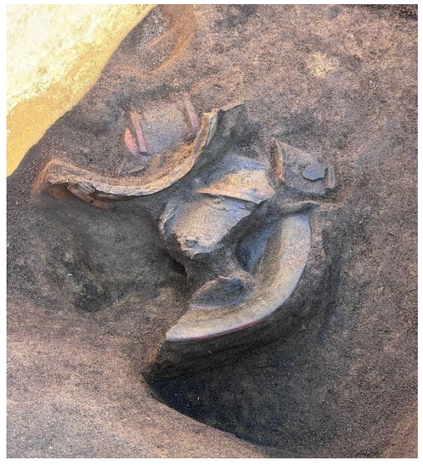
３トレンチ全景

ていた可能性が高まりました。この２号竪穴建物の東には並び建てられたかのように３号竪穴建物が確認されました。覆土の状況や出土遺物の様相から、こちらも工房と考えられ、廃絶後に土師器を焼成していたことも判明しました。

２号竪穴建物



２号竪穴建物・埴輪出土状況

４．まとめ

令和６年度の調査で幻に包まれていた群馬県中央部での埴輪窯が発見され、大きな注目を集めた石山南遺跡・石山南古墳群の埴輪製作関連の遺構群ですが、今年度から本格的にその内容確認、範囲確認調査を開始しました。残念ながら埴輪窯の検出はありませんでしたが、埴輪製作に関わる工房と考えられる竪穴建物などが複数検出されました。各地の埴輪製作にかかわる遺跡でも大型の工房が検出されている例があり、この遺跡もかなり大規模な埴輪生産を行っていた可能性が高まりました。

現地説明会資料　　令和８年２月８日(日)

石山南遺跡（いしやまみなみいせき）・石山南古墳群（いしやまみなみこふんぐん）（３次調査）

調査主体　伊勢崎市教育委員会文化財保護課
調査期間　令和７年 12 月１日～
調査面積　約３００㎡

はじめに

石山南遺跡･石山南古墳群はこれまで数回の発掘調査がなされ､数多くの古墳がみつかっている遺跡です。平成 27 年に実施した赤堀村 104 号墳の調査では、多くの人物埴輪が確認され、その一部が東京国立博物館で所蔵しているものと接合し、さらに令和６年度の発掘調査では古墳以外に伊勢崎市ではじめて埴輪窯が検出されるなど大変注目された遺跡です。これらの成果をうけて、伊勢崎市ではこの遺跡を重要遺跡に位置付け、今年度から内容及び範囲確認のための調査を開始しました。

これまでの調査と調査区位置図

１．これまでの調査成果

石山南遺跡･石山南古墳群は石山と呼ばれる流れ山の南に位置し､古くから数多くの古墳の存在がみられ、多くの埴輪が出土することでも有名でした。平成２７年度の調査で確認された赤堀村 104 号墳からは大量の埴輪が出土しましたが、人物埴輪も数体含まれていました。そしてこの人物埴輪４体が東京国立博物館所蔵

の人物埴輪と接合することが判明しました。このことが契機となり、有名な「鍬を担ぐ男子」という埴輪も104 号墳出土であるということが判明したのです。

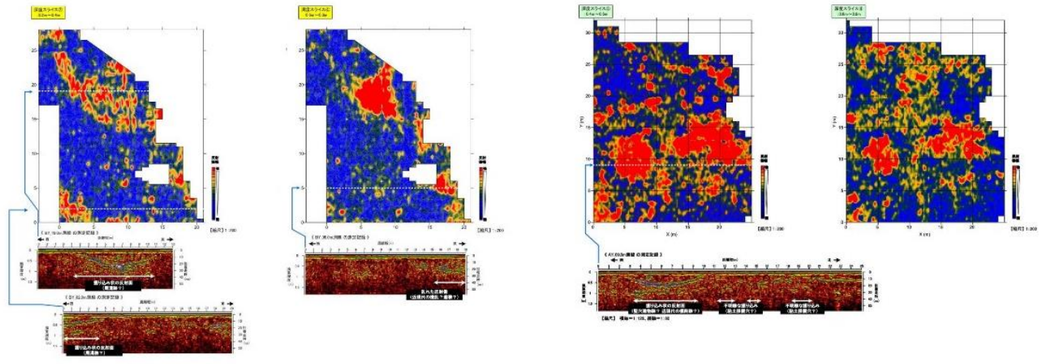
次に調査が行われたのは令和６年度で、この年の調査では赤堀村 107 号墳が検出され、鹿埴輪、所謂「見返りの鹿」がみつかりました。さらに古墳の南側では市内で初めての発見となる埴輪窯が１基確認されました。窯跡とともに埴輪造りの工房と考えられる竪穴建物や粘土採掘坑も検出され、埴輪生産にかかわる遺跡が広がっている可能性が高まりました。そこで今年度から５か年計画で周辺での調査を計画し、この埴輪生産に関わる遺跡や古墳群の様相を掴むこととしました。

２．レーダー探査の成果

発掘調査に先立ち、まず地中レーダー探査を行いました。これは地中にレーダーを飛ばし、その反射の状況で地下にどんなものが眠っているかを探る調査です。この成果を取り入れて発掘を行うことで、ある程度、遺構の存在を推定しながら調査を行うことができるわけです。

北側の調査地点では北よりに 20～40cm の深さで古墳の周溝のような反応がみられました。これは平成 27 年度の調査でも確認されていた赤堀村 105 号墳の周溝の可能性が高まりました。また、この溝周辺は下層になると大型土坑のような形状になり、古墳の石室前庭前の土坑になる可能性が考えられました。

南側の調査区では中央部やや西側に大型の反応が見られました。現地表面から 20～40cm から 1.0～1.2m ほどの深さまで反応は続いており、大型の土坑のような形状です。粘土採掘坑は大型で深いことから、これが粘土採掘坑かもしれませんし、埴輪窯が重なっている可能性も考えられ、発掘に期待が持てました。また、その東隣にも大型の反応が見られ、下層にいくと複数の土坑が重なり合っているような形状にも見えます。



地中レーダー探査の成果

３．発掘調査の成果

発掘調査はレーダー探査を行った２地点で、それぞれ２つのトレンチを設定し行いました。

１トレンチでは予想通り赤堀村 105 号墳が検出されました。墳丘部は削平されていましたが周溝、石室の一部（閉塞部）が認められました。周溝から墳丘にかけては探査の結果に符合するように大型の土坑があることも確認されました。この石室前庭前の大型土坑の存在や、埴輪がまったく出土しないことから、105 号墳は７世紀代の終末期古墳と考えられます。

２トレンチでは一辺４ｍほどの竪穴建物を１棟検出しました（１号竪穴建物）。まだ底面までは掘り下げていませんが赤く焼けた層が検出され、土師器が数多く出土しています。埴輪作りの工房跡の可能性を考えて

１・２トレ全景

赤堀村 105 号墳・石室閉塞

いますが、その後、建物内で土師器を焼成していた可能性が想定されます。

３トレンチではレーダー探査の成果通りに大型の落ち込みを二箇所確認しました。長径、短径ともに８ｍ近くあり、かなり大型です。当初、粘土採掘坑が重複している、もしくはその採掘坑を利用した埴輪窯が存在している可能性などを考慮しながら調査を進めました。調査の結果、これは１つの大型竪穴建物であることが判明しました（２号竪穴建物）。建物の規模は南北８ｍ、東西 6.5m、深さ 90cm ほどとかなり大型の建物ですが、現状でカマドは確認されていません。はっきりとした床面らしき層はまだ未検出ですが底面付近には赤く焼けた層が数か所で見受けられます。下層からは多くの埴輪や粘土塊が出土し、土師器の甕や坏もみられます。これらのことから一般的な住居というよりは工房のような性格が高いと考えられます。１号竪建物と同様に焼けた層や破裂した土師器砕片、埴輪屑も多く出土しており、建物廃絶後に土師器焼成も行っ

２トレ・１号竪穴建物

出土したハケ目の甕